川崎医会誌一般教，23号：67－71(1997)

ひとつのいのち

その気付きのための理性(8)

―人格的一神教の系譜と回心―

川崎医療短大　医用電子工学科　　川崎医科大学名誉教授

中　川　定　明

(平成９年10月23日受理)

A common life of all the living things

— reason for the enlightenment of itself — (8).

Sadaaki NAKAGAWA

Professor Emeritus, Kawasaki Medical School

Kurashiki, 701-01, Japan

(Received on October 23, 1997)

Ⅰ．ヒンドゥ教と釈迦による理性的仏教の創始

「ヒンドゥ」とは，イスラム教徒のペルシャ人がインダス河を「ヒンド」と呼んだことに由来し，インド人の異なる信仰を指してヒンドゥ教徒といった。それは，前回記したキリスト教・イスラム教と違って，インド人とともに発生した民族宗教である[1]。その由来は非常に古くて紀元前十四世紀頃に，西欧人とおなじ祖先をもつアーリア人が，カスピ海沿岸・コーカサスの草原から西北インド・インダス河の上流地域に侵入してきて原住民たちを征服し，支配体制をかためた頃にさかのぼる。かれらは，信仰厚いアーリア的な氏族制度をつくって司祭者（バラモン）を自称し，その枠組みの下に，非アーリア的なクシャトリア（王族･武士），バイシャ（農･工・商など庶民）とシュードラ（隷民）の階級制度・カーストを押しつけ，さらにその下に不可触賤民を置いて，相互間の交際や結婚を禁止する厳重な制度であった。こうして，アーリア的・非アーリア的な雑多な宗教が混在するヒンドゥ教の性格ができあがった。アーリア的な文化とはバラモン階級の文化であり，サンスクリタ・大伝統として権威づけられ，紀元前七世紀から後三世紀にかけて『ヴェーダ聖典』をつくった。『ヴェーダ』は，アーリア人の伝承保持者が神秘的な霊感によって得た啓示にもとづいた聖典とされ，本来は宗教的な知識を意味する[2]。それと同時にウパニシアッド哲学ができたが，これは知識を重視する思想であり，宇宙の秩序の根本原理は，多くの神々より優位にあるブラフマン（梵）であり，超人的神性が個人存在の主体であるアートマン（我）は，ブラフマン（梵）と合一すること，「梵我一如」によって業（ごう・カルマ）がもたらす輪廻（りんね）から解脱できるとした[1,3]。後で記すが，解脱に到る方

法で大切な行はヨーガ（禅，結ぶ意味）特にバクティ・ヨーガ（信愛の方法）で，神々と人とが愛によって結ばれ，神々への絶対的帰依と服従に対して神が恩恵を下さるとした[1]。おもしろい事に，一般のアーリア人が難解なウパニシアッド哲学を避けて実際に信じていたのは，複数の神々をもつギリシア，ローマやペルシアの神話と同じものであった。元来はアーリア人がインド・ヨーロッパ（印欧）語族に含まれることによるのだが印欧語族には，東はインドのサンスクリット語族とヒンドゥ語族が含まれ，中近東ではペルシア語，地中海沿岸のギリシア語，ラテン語族から，西は英・独・スエーデンのケルト語族，北ではロシア圏のスラブ語族など，非常に広範な言語族が包含され，前四千～三千年頃に南ロシアから東ヨーロッパにかけて原住した民族が，なんらかの事情で部族毎に諸方向に民族移動を起こしたのではないかといわれる[3]。ところで，カースト制に加えて大別しても十五を越える雑多な民族からなるインドにあって，ヒンドゥ教の教説は，いわゆるインド人の形成につれて古代から形成された大衆的自然宗教で，その内容は雑多であり，自然現象を崇拝して神格化したアニミスム的なものも含まれ，なかには多くの呪物崇拝さえ含まれていた。人々は，それらの神々を祭ることによって幸福を得，災疫を除いてもらおうと努めた。それにも関わらず，ヒンドゥ教として一括され統一されるのは，カースト制を基軸にした習慣のなかに存在する共通性に由来するという。インド人らは，各自の信ずるものを「ダルマ・法」と呼び，特定の宗教も教団組織も作らなかった。バラモンのウパニシアッド哲学と共存して，民俗宗教としてのヒンドゥ教は，多神または汎神教的な宗教になり，神格を持つ神の数は三十三（三十三天）から三千数百神にも及んだともいう。それらの主宰神がインドラ（帝釈天）であり，有力な神々にクリシュナ，シヴァ，ブッダ，ヴイシュヌなどなどが挙げられた。このうちブッダは生きものを愛護して，いけにえの風習を止めさせるために現れた神といわれた。帝釈天とブラフマン（梵）との関係には諸説があって一致しない。神々のなかにブッダの名があるために，一般のインド人は仏教をヒンドゥ教の一部とみなしている[1]。この論文では，仏教を創始した仏陀をゴータマ・ブッダまたは釈迦と記すことにする。

Ⅱ．ゴータマ・ブッダ（釈迦）の解脱と理性的な仏教

約三千年以前の釈迦の出生の諸説があるのは当然のことであるが，中村　元説が世界の学会で最も学問的とされている[3]。紀元前五世紀にヒマラヤ中腹・コーサラ国の王子として生まれ，王候・武士階級のシャカ族に属する人であったことは間違いなく[3]，カピラ・ヴァッツ（衛城）の遺跡が現在のネパールで発掘されている。釈迦が生きた時代のバラモン階級の思想家達は「梵我一如」を称えながらも「我」へと指向して，自我に目覚めようとする時代であった。自我の目覚めは庶民のバイシャ階級にも興った。都市の商工業者たちが富を蓄えて実権を握り，旧来のカースト制は崩れる方向をたどり，物質的な裕かさが道徳的な頽廃をまねいて，自由享楽の風潮があらわれた。またバラモン文化を斥けて自由に思索し生活する新しい思想家達の中には，唯物論者，懐疑論者，道徳否定論者や快楽主義者がいた。仏典では，これらの人々を「六師外道・仏教以外の思想家」と呼んでいる。六師のうち，釈迦とならぶ指導者にジャイナ教を称え

たニガンダがいた。釈迦より廿才年少で，やはり王侯族の出身であったが，ジャイナ教は仏教とならんで信仰された。仏教と違うところは，釈迦の苦行否定にたいして苦行主義を，無我説「空観」に対して要素の実在説を説き，業による輪廻を容認した。現在も百万人ほどの信徒がいる。

釈迦は「梵我一如」的なバラモン文化のおごりを斥け，民衆のこころを正しい方向に向けることを目指す思想家として登場した。釈迦の解脱と説教は，いわゆる「古い皮袋に新しい酒を盛る」創意に溢れたものであり，古いウパニシアッド哲学の権威主義，秘密主義を破るものであった[2)]。あたかも，新しい仏教が興った日本の中世に相当する時代であったと推定される。釈迦が開いた仏教では，カースト制度の廃止を主張したことが大きい特色で「生まれを問うことなかれ。行いを問え。」[4)]といった。若くして無生，不老，無病，不死のニルヴアーナ（涅槃）を求めて宮殿を抜け出して出家した釈迦は，多くの苦行者（比丘）がしている「断食苦行をして骨と皮になるほど痩せることは，決して悟りへの道ではない」と，それまで五人の比丘と苦行を共にしていたのをある日突然放棄し，その直後に独自の悟りをひらいた[2)]。増谷氏によれば一般に「悟り」というのは，先ず直観が，突然に受身のかたちでおとずれ，その後で能動的な思惟が働いてそれを整理し，論理的・公式的なものが生まれる過程であるというが，「ひとつのいのち(6)」で記したように，まさにその通りであると思う[3)]。

限られた紙面で釈迦の悟りの内容を表現するには難しいが，四つの諦めである「四諦」と「中道」「空観」に要約される。仏教でいう諦めとは，明らかに知ることであり，真実をありのままを受け入れることである[2)]。「四諦」と「中道」「空観」については後で再述する。釈迦の教説は二十五年間ブッダに近侍したアーナンダ・阿難と，教団の規律や戒律に詳しいウバーリ・優波離が，記憶の便のために主として偈（詩）や短文の形にしたといわれる[2)]。釈迦は，或る偈「ウダーナ」の中に，「まことに熱意をこめて思惟する者に，かの万法のあらわとなれるとき，彼の疑惑はことごとく消えさった。諸縁の滅を知ったからである」[2)]と述べた。また，最も古い釈迦の説法（原始仏教聖典）とされる『スッタニパータ』[4)]には「これ有るゆえにこれあり，これ滅すればこれなし」という縁起の悟りが，理性的な悟りとして記されている。もうすこし細かく記すと，愛欲があるから執着があり，執着によって生存（有）があり，生存によって生・老・病・死とそれらに伴う愁・悲・苦・憂・悩が生ずる。「もろもろの苦は心によって作られる」ということであって，当然のことである。その心を滅するのに万人は苦労するのであるが，滅することはできない。その心は人間に，そして多少とも生きとし生けるものに，生まれつき具わったものであるから「ありのまま」を明察するほかはない。これが「四諦」である。釈迦は「自分の心が，このようであれ」とか「こうあることがないように」とすることはできないという。自分の心と思っている「我」なる生存（有）は，本来「空」だからと説く。あらゆる存在は，時間的にも空間的にも相関的で，絶対的なものは無い。これが釈迦の「空観」である。釈迦が解脱した輪廻とは，後世の仏教説話や，三島由紀夫が『豊饒の海』[5)]で表現したような生まれ代わりではなくて，現に生きているあいだに，妄執に憑かれてこの状態からあの状態へと，限り

無く流転して止まないことである。釈迦にとって，俗にいう「あの世」とか「来世」も全く意識の外にあった。また「修行者はヴエーダの呪法，天変地変の占い，夢占いと星占いを完全に止め，吉凶の判断をすてて，正しく世の中を渡れ。」とか「真実は実に不滅のことばである。永遠の理法である。…真実は一つであって第二のものは存在しない。その真理を知った人は争うことがない。」などと説き，はては，千を越える『スッタニパータ』の偈の1146番「誤った信仰を捨て去れ。」などと，記されている。そして，目覚めた人・ブッダといわれた釈迦は「ああ短いかな人の生よ。百才に達せずして死す。また老衰のために死ぬ。」と老いを達観した。釈迦の説法で最も難しいのは「中道」であり，それに伴った「八正道」(正しく見，聞き，語り，思い，思索し，行い，努力し，瞑想する）であるが，なにが正しいかの判断に資する適当な偈として「84番，疑いを超え，苦悩を離れ，執念をもたず」「271番，貪欲と嫌悪とは自身から生ずる」「537番，偽りと慢心とを避けよ」「781番，欲に引かれ，好みに囚われている人は自分の偏見を越えることができない」「849番，過去にこだわらず，現在に悩まず」「148番，生きとし生けるものは，幸せであれ。」などを挙げるに止めるが，自分が正しいとするものへの偏見を捨てるほかはないようである。それは，解脱・ニルバーナを得たといわれ，神格化された尊敬を集めた釈迦が，八十才の生涯をかけて，終わることのない修業の道「菩薩道」であったと同時に，「生きとし生けるものは，幸せであれ。」という「慈悲」の道でもあった。自身の苦しみから解脱して，生きとし生けるものへの憐愍に思いを馳せるゴータマ・ブッダの教えは，釈迦が入滅（死去）して涅槃・ニルバーナに入った後，五百年以降に興った，大衆を救済するという意味で大乗（大きい乗り物）仏教を称えた人達，特に竜樹大師から，小乗仏教と呼ばれた。ちなみに竜樹は，修業を尽くして涅槃・ニルバーナの境地に達しながら，なお「如来」まったき人への道中にある沙門・僧侶のことを菩薩と呼んだ。弥勒，観音などは菩薩であり，釈迦を如来として尊び，大日如来，阿彌陀如来，薬師如来と同列に置いた。

早島鏡正著『ゴータマ・ブッダ』には，釈迦晩年の悲劇が述べられている。隣国のコーサラ国王が，釈迦の言葉が意味する阻止によって軍を三度引いたにも係わらず，四回目の進軍でシャカ族は殲滅された。釈迦は「宿縁があったのだ」と諦めて同族の悲劇を受容したという[2)]。

参 考 文 献

1) ヒンドゥ教：小口偉一，堀　一郎監修：宗教学辞典，東大出版会，1973.
2) 岩本　裕：アーリア世界とガンジス古代国家．岩波講座，世界歴史，古代3，1970.
3) 早島鏡正：ゴータマ・ブッダ．講談社学術文庫・第十二刷，1996.
4) 中村　元：ブッダのことば・スッタニパータ．第三十刷，岩波文庫，1996.
5) 三島由紀夫：『豊饒の海』(一～四)．新潮文庫，33刷，新潮社，1991.

後　　記

本稿の著者は去る９月19日に急逝されました。本稿は８月21日に開催された本誌一般教投稿希望(23号)論文要旨発表会に著者自身から発表された，いわば公表有資格論文である。しかし急逝の日付から締切期限（10月中旬）までの御寄稿はあるまいと思惟していた。それでも編集委員の１人が御遺族に連絡をとり著者宅のフロッピーディスクから打出されて来たものがこの論文であった。拝読させていただくとまだ論文の書式（表題，概要，文献等の記載）が未完であったが編集委員による大幅追加はせずに公表することとした。会員の皆様にはこの様な事情を賢察し遺稿の精読をお願いしたい。著者の冥福をお祈りします。

編集委員会